

まごころだより

2018.11月号

10月中旬一人の大学生が卒業論文作製のため東京からやって来ました。とても元気な女子大生で、高速バスで富山入りし、朝から夕方までまごころで過ごした後、満天の湯で時間をつぶし夜行バスで東京に帰って行きました。世界各地(勿論日本も含めて)の抱えるさまざまな課題を考えるとという勉強をしてきたそうです。今までにも能登の過疎の村に入り、村を元気にすることを考えてきたといいます。卒論を書くにあたり、魚津という地方都市のデイサービスが地域の人に施設を開放し、高齢化した地域の人々のつながりを取り戻そうとしていることを知ったようです。寺のこと、デイサービスのこと、地域の現状、そしてこのような活動を始めた理由、活動を通して感じたこと、今後の活動の課題と盛りだくさんの質問を準備しての訪問でした。利用者の方と一緒に食事をし、活動にも参加してくれました。明るく爽やかな彼女に卒業後も頑張るとエールを送りたくくなりました。

地域を考えるとというのは、今の社会的テーマの一つのようです。11月上旬には東京の大学の地域構想研究所の研究者5人が聞き取り調査や見学のための来訪を希望されています。



天神山でサマイモを食べました

人口が加速度的に減少し、高齢化が進む今の日本でどうすれば安心して生きていけるのかが大きな課題です。私は人口減少によって高齢化する社会で、安全に安心して生活するために必要なのは、「人と人のつながり」だと思っています。人間関係が希薄になっていく中で、地域のつながりはどうすれば取り戻せるのか。またつながりを取り戻した地域で安心して住み続けるには、更に何が必要となってくるのか。体が不自由になっても、認知になっても「人と人のつながり」によって安全で安心して生活できる街をつくる、それが基本です。

しかし、一方で人口減少による労働力不足を見越して「人を必要としない」社会を目指す動きがあります。最近の話題図書「ホモデウス」の作者は、工場などの製造

業だけでなくサービス業でも機械化・自動化によって人間がいなくなる「人を必要としない」社会の到来を予測しています。多く労働者は単に失業者になるのではなく『無用者階級』になるのだと述べています。

すべての産業が機械化し、人間が無用となる。そういえば、国は介護ロボットの導入を積極的に進めています。技術が進むと機械浴にとどまらず、すべての業務にロボットが導入されるでしょう。そのうちロボットによる食事介助があるかもしれません。



分家食事会のメニューです

考えてみると、以前は銀行での預金や出金・送金は窓口で人が行っていました。それが今ではATMという機械で行うようになりました。ガソリンスタンドもセルフがほとんどです。駅でも切符は機械で買い、改札口にも人はおらず切符は機械に吸い込まれていきます。飲料水だけでなく、いろいろな自動販売機が街のあちこちにあります。一昔前には普通にあった対面販売をする八百屋や魚屋などの個人商店がなくなり、スーパー・マーケットという自分で品物を選んで籠に入れる方法に代わりました。そして今やレジもバーコードを使って自分で行うところも現れています。車も自動走行車の開発が進んでいます。人口減少を見込んでいるのでしょうか、あらゆるところで無人化が進んでいます。私たちは多少の戸惑いや不便さを感じるものの、次第に慣れ、ここまで科学は進歩したのだと喜んだりします。しかしこれがもっと進むと恐ろしい社会になっていくのです。人の代わりに機械が働き、多くの人が「無用者」となるのです。

若く働きたくても、働く場所も社会参加する場所もない人が増える。「必要とされない人」が増え、街にあふれる。それはすさんだ世の中になるだろうと想像します。高齢になると自分が人の役にたっているという実感が持てなくなります。家族がいて何不自由ない暮らしであっても、何もすることがなく、自分が誰からも必要とされていないと思うことほど悲しく寂しいことはありません。一昔前ならあった近所とのつながりもなく、一日中誰ともしゃべらず過ごす。以前なら買い物にでも出かければ、少なくとも店の人との会話はありました。でも今はそれもないのです。だからまごころに来て、なじみになった人と喋り、みんなと食事をし、ちょっとした家事や仕事

を手伝い、『ありがとう、助かったわ』と言われる。そんな時間を過ごし、特別のことは何もなかったけれど、楽しかったと言って帰って行かれます。ささやかな喜び、楽しみを味わってもらえたと感じられること、それがまごころの職員の喜びです。

しかし「無用」というのは何に対して無用なのでしょうか。そこにあるのは経済優先、効率優先の社会ではないでしょうか。生産活動・経済活動のない者は無用だとするならば、それは恐ろしい考えです。差別につながる思想です。人にとっても社会にとっても危険な考えです。機械化され効率を求める社会。物質的な豊かさと便利さを追求した結果、私たちは心の豊かさを失っただけでなく、公害や汚染、有害物質によって命をも危うくする事態に追い込まれ、世界史上最悪の原発事故を経験しました。経済的に、手っ取り早く、合理的にということをも優先し、作業としてこなしていくということが本当に人間にとって、いや人類にとって必要なことなのでしょうか。私たちの未来に本当に必要なものは何なのでしょうか。

もし大量の「無用の人」が社会に出現したとき、人々を救うことができるのは、やはり人と人のつながり、人の暖かさではないかと手前味噌かもしれませんが、私は思っています。

時代の流れには逆らえません。人口減少を食い止めることができない限り、機械化、自動化の流れは避けられないと思います。それでも地域を大切に、人とのつながりを求めて活動を続けていこうと思っています。

富山型フォーラムのご報告

2年に一度、富山ケアネットワークが主催する地域福祉フォーラムが、富山市にある“サンシップとやま”で10月21日に開催されました。

今回のテーマは「お互いさまの暮らしをめざして」～今、わが町に求めるもの～として約300名の出席を得て開催されました。

オープニングは「祝・富山ケアネットワーク20周年」として各事業所の利用者を主とした、富山型コレクション!のファッションショーから始まりました。出演者は小学生、成年、高齢者、皆さんデイサービスを利用されている方で、まごころからはお二人の利用者が参加しました。それぞれ思い思いの衣装でお気に入りの曲に合わせて登場され、その出で立ちに驚きや、笑いやらで会場は大いに盛り上がり楽しいスタートを切りました。

次は「今、わが町に求めるもの」として四人のパネリストによるディスカッションに入り、意見や要望を話されましたが、魚津市在住のパラスポーツ選手の藤井友里子さんのお話があり「支援学校に通い、沢山の事を学んできたつもりだったが、卒業後は一人で外出することで困難になることがとても多かった。その時は松葉杖で移動していて両手が塞がっているため、雨降りの時どう

やって傘をさしたらいいのか分からず、転倒したことも何度かあった」と言われ、また「切符の買い方とか電車に乗るには前もっての予約が必要で、間に合わない時などは再度予約が必要になり、直ぐ後の電車に乗る事ができなかった」など、学校では一般的な社会生活に必要な極あたりまえのことは何も教えてもらえてないことに気付かされたと言っておられました。藤井さんは社会生活に役立つリハビリや訓練を組み入れた方がいいのではないかと仰っておられました。

フラットの宮袋さんはその点では、支援学校より普通学校での生活の方が社会生活に役立つ学びが多いのではないかと、一緒に生活することで障がい者は遠慮なく助けを求める事が出来るようになり、健常者は普通に手助けが必要かどうか分かるようになる。生徒たちは毎日触れ合うことでお互いの理解が深まるのではないかと思う。そして障がいの子も健常の子も幼い頃から接した子はお互いに普通の友達として付き合っていると仰っていました。

まだまだ福祉関係にかかわりが少ない子供達が多いなか、健常者と障がい者が多く関われる機会を作っていくことが必要ではないか。私達にしても社会生活の中で自分達が普通に出来ていることが障がい者にとってとても難しいことがある、自分には簡単なことでも想像が出来ないようなことで苦勞をされているということを知っておかなければならない。そしてそんな方を見掛けたとしたら、即座に声をかけられる人であらねばならないと考えさせられたディスカッションでした。



11月の行事予定

- 3日(土) お寺の報恩講
- 5日(月) ハーモニカ伴奏でうたいましょう
- 7日(水) かわいい・きれいな小物づくり
- 13日(火) 林夫妻の歌謡ショー
- 14日(水) 防火・避難訓練
- 16日(金) ピアノに合わせて歌いましょう
- 22日(木) 惣菜またはお菓子づくり
- 27日(火) 民謡と踊り
- 29日(木) おしゃべり・にぎやか食事会
- 30日(金) 三味線と民謡・踊り